

# 大阪大学 浦田悠

ハイブリッド授業への注目  
多くの大学で学生が戻りつつあった昨年の後半から改めて着目されてきたのが、ハイブリッドもしくはブレンド型と呼ばれる授業形態である。これらは、学習の少なくとも一部をオンラインで実施し、対面とオンラインを効果的に組み合わせる学習形態の総称である。反転授業やローテーション型授業などのブレンド型授業は従来から行われていた。

しかしコロナ禍では、三密を避けるために学生をグループ分けして週ごとに入れ替える分散型授業や、対面・同期オンライン・非同期オンラインの3つの授業形態を学生が自由に選べるようにするというハイフレックス型授業もよく聞かれるところとなった。研究者や機関によってそれぞれの授業形態の定義は異なるが、一般的な定義に沿って各授業形態を図にまとめた。

私が所属する大阪大学においては、対面授業を主体にしつつ、オンライン授業（阪大ではメディア授業と呼んでいる）を併用する「阪大版ブレンド教育」を、今後の標準スタイルとし、教育の質向上を目指した活動を推進することが目指されている。このような学習環境を実現するために、ネットや電源はもちろんで、ディスプレイやプリンタ等の機器の整備が必要となる。教室に講義自動収録配信システムが設置されている場合は、毎週の授業がライブおよびオンデマンドで自動配信されるため、教員側の負担はほとんどない。

授業が可能な教室も見られるようになってきた。これらのシステムがない従来の教室でも、対面とオンラインの学生がやりとりできるスピーカーフォンと、黒板や教員の姿を映すウェブカメラがあれば、とりあえず小規模のハイフレックスを実践することは可能で、1教室あたり2〜3万円程度で導入することができ、整備していけばよいくらいに、アメリカの高等教育レベルのICT推進機関であるEDUCAUSEでは、LSRSという学習スペースの評価システムが開発されており、私もその翻訳に関わっている。LSRSは、大学のマスタープランや学習スペースのデザインのプロセス、環境の質や家具やレイアウト、ICT



浦田悠 大阪大学 学術情報学センター 学芸員

## コロナ禍の学習環境 その現状と課題、および可能性

〈下〉

教室に必要な機器やサポート体制、考慮すべき事項の基準が提示されているので、関心のある方は参照されたい。

コロナ禍のラーニングスペースの評価システムが開発されており、私もその翻訳に関わっている。LSRSは、大学のマスタープランや学習スペースのデザインのプロセス、環境の質や家具やレイアウト、ICT

また、感染対策上、グループ学習を見合わせ、個人学習やオンライン授業を受けるスペースにしたところもあった。コロナ禍で広く展開されていた学生スタッフの活動はほとんど施設で縮小もしくは見合わせとなり、縮小の場合は、学習相談／チュータリング、セミナー等のイベントがオンラインで実施されることになり、大学としてハード面とソフト面の双方からの支援が求められる。

**対面**  
LIVE, REC, DOC

**オンライン**  
LIVE, REC, DOC

**ハイブリッド (ブレンド型)**  
LIVE, REC, DOC

**ローテーション型授業**  
LIVE, REC, DOC

**反転授業**  
LIVE, REC, DOC

**分散型授業**  
グループA, グループB, LIVE, REC, DOC, 1 Week

**ハイフレックス型授業**  
LIVE, REC, DOC

同時動画配信  
非同時動画配信  
資料配信

今後の未来予測は論者によって異なるが、私自身はこの先また感染状況が著しく悪化しない限りは、基本は対面帰りの傾向が続くと考えている。第5波が収束してきて11月現在でも、ほぼ対面のみに戻った大学も確実に増えている。感染不安等への配慮が必要で、対面という傾向は今後も続くことが予想される。